彙報

一九九四年一月より
一九九四年一二月まで

班研究

六朝美術の研究　班長　曾布川　寛

一九九〇年四月から五年の計畫で始まった研究班は、六朝を中心に後漢、隋唐を含めた時代を扱い、この時代の美術全般についてより精確な理解をめざそうとするものである。具體的な方法としては出土文物、石窟寺院などの佛教美術、書論や畫論などの藝術論を三本の柱に取り上げる。今年は班員及び招請研究者による以下のような研究發表を行った。また併せて造像記と藝術論の會讀を行い、造像記は寶山靈泉寺石窟造像記（大内文雄擔當）、藝術論として宗炳『畫山水序』、王微『敍畫』（曾布川寛擔當）、『梁武帝與陶隱居論書啓』（下野健兒擔當）を取り上げた。

一月二四日　北燕馮素弗墓について　外山　潔
一月三一日　懷素自叙帖參觀記　下野　健兒
二月　七日　響堂山造像様式系譜試論　山名　伸生
二月二一日　京都國立博物館收藏繪畫の調査　西上　實
四月一八日　中國古代の金銀器について　齊　東方
四月二五日　騎獅文殊・騎象普賢の圖像―中國における成立過程―　小島　彩
五月二三日　麟遊慈善寺石窟について　山岸　公基
六月　六日　中國における佐波理について　中野　徹
六月一三日　禪僧の墨戯―蘆雁圖の展開―　太田　孝彦
六月二三日　豐城窯について　伊東　徹夫
七月　四日　北魏正光五年匡僧安墓誌をめぐって　木島　史雄
九月二六日　北朝末隋初の山東造像の意義―諸城、博興の出土品を中心として―　稲本　泰生
一〇月二四日　中國における書論研究の現狀と課題　大野　修作
一〇月三一日　インド古代佛教壁畫の研究補遺及び「變」について　定金　計次
一一月二一日　題跋を讀む　中砂　明德
一二月　五日　六朝時代の自然觀と藝術觀―山水詩と風景詩―　宇佐美文理
一二月一二日　北朝畫壇の趨勢　河野　道房

法顯傳研究　班長　桑山　正進

法顯の行歴記は、當時の中央アジア、インドの佛教事情を活寫している。一九世紀の佛訳注一例、二〇世紀初めの英訳注三例、日本語訳注二例があるけれども、いずれもout of dateである。當班は章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社、一九八五）をテキストにとりあげ、その注を讀みつつ、これらの諸訳を照合し、また『水經注』の記事を參照して、擔るべき現代語訳を作成する。あわせてその内容である五世紀の中央アジアとインドを班員の專門分野である歴史、言語、宗教、考古、美術などの多角視點をもって検討する。班員とその會讀分擔は以下のとおり。高田時雄（序から校注説明まで）、森安孝夫（于闐まで）、吉田豐（竭叉から陀歴まで）、春田晴郎（烏萇から弗樓沙まで）、小野浩（那竭から沙祇大國まで）、入澤崇（拘薩羅舍衛國から佛般泥洹處まで）、中谷英明（毗舍離から薄沙王舊城まで）、武内紹人（伽耶城から多摩梨帝まで）、桑山正進（師子國）、稲葉穣（浮海東還）、船山徹（高僧傳中の法顯、智嚴、寶雲の傳記）、榎本文雄（經錄等）。本年は桑山分擔箇所の途中まで検討した。

中國音韻史の研究　班長　高田　時雄

本研究班は一般の書目には著錄されることの稀な明清の韻學關係の書物を取り上げ、序跋や凡例を讀みつつ、その資料的性格を闡明しようとするものであり、最終的には『小學考』の補編とも

いうべき明清の音韻學書の提要の作成を目的とする。二年目にはいった今年度は、以下の資料に關する班員諸氏の報告を得た。

韻畧匯通（太田齋）、五方元音（木津祐子）、切韻聲原（佐藤晴彦）、韻表（岡島昭浩）、李氏音鑑（森賀一惠）、新安鄉音字義考正（平田昌司）、西儒耳目資（高田時雄）、韻學集成（淺原達郎）。

前近代中國の法制　班長　梅原　郁

前近代中國の歷史の中で「法律」がどのように形成され展開していったか、また他の歷史世界と比較してどんな特性を持っていたかといった關心のもとに、先秦時代から清代に至るまで幅廣く多樣な問題を追求している。共通のテクストとしては、新出の敦煌漢簡と、本所が傳統的に研究を進めている敦煌文獻の中の法律關係の資料を使用している。

明末清初の社會と文化　班長　小野　和子

今年度はこの共同研究の最終年度であるので、研究報告を中心に研究會を行なった。そのテーマは政治史、社會經濟、都市問題、邊境、風俗、思想など多方面に及ぶ。目下、明末清初期の變革に焦點を絞りながら、研究の成果をまとめる豫定で準備を進めている。この間、中國社會科學院歷史研究所の周紹泉氏が三月から九月まで、客員教授として來日されたので、三月と七月に六日間、及び四月から六月に至る間、毎週研究會の開始前一時間にわたって、徽州文書、とくにその草書についての講習を行なった。

一月一八日　魏學會と寧夏兵變　岡野　昌子
一月二五日　訟師秘本『蕭曹遺筆』の出現　夫馬　進
二月　一日　劉翠溶『明清時期家族人口與社會經濟變遷』　森　正夫
四月一九日　章學誠文史校讎考論　余　英時
四月二六日　明末北邊防衞の一側面　谷口規矩雄
五月一〇日　六經皆史說の系譜　井上　進
五月一七日　明清史研究與中國家譜資料　張　正明
五月二四日　明末地方官の人事異動と地域輿論　車　惠媛
五月三一日　清代綠營の配置と管轄範圍　太田　出
六月　七日　明末福建諸都市の火災と防火　堀地　明
六月一四日　徭役と官僚收入のあいだ　伍　躍
六月二一日　中國の明末農民戰爭史研究に見る華北地域社會についての史實　吉尾　寛
六月二八日　徽州文書所見明清徽商的經營方式　周　紹泉
九月二七日　明末杭州府錢塘縣・仁和縣における救荒について　藤田　佳美
一〇月　四日　續・徭役と財政のあいだ　岩井　茂樹
一〇月一一日　「二十四孝」の影　大澤　顯浩
一〇月一八日　清初の権關について　松浦　章
一〇月二五日　清代における奢侈　稻田　清一
一一月　一日　明代黃册原本の考正　欒　成顯
一一月一五日　隆慶期の內閣政治　櫻井　俊郎
一一月二二日　政書の時代　谷井　陽子
一一月二九日　都市行政・「公的領域」と善會・善堂　夫馬　進

中國技術史の研究　班長　田中　淡

本研究班は、一九九一年四月から向こう五箇年の豫定で、中國の傳統的技術の特質について、とくに生活科學・技術の關連分野を主たる對象としてとりあげながら、檢討を加えてゆこうとするものである。當面、研究會は技術史全般に關わる分野を主とし、關連の特定分野を副とする二本だての構成をとり、前者は元・王禎の『農書』、後者に梁啓雄輯『哲匠錄』疊山篇をそれぞれテキストに選び、會讀・譯注作成をすすめてゆく豫定である。また、それと並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究發表を隨時行ってゆく。

標記の期間に、王禎『農書』農器圖譜・倉廩門、鼎釜門、錢鎛門、舟車門、灌漑門の譯注を中島長文、白杉悅雄、武田時昌、黃蘭翔が擔當した。また、左記の研究發表が行われた。

一月一八日　清代臺灣都市の構造特性—臺南、新竹を中心にして　黃　蘭翔

一月二五日　粉食と粒食　石毛　直道
二月　八日　中國人と洞穴觀念　三浦　國雄
三月　一日　韓國科學史研究の現狀　坂出　祥伸
四月一九日　北魏洛陽と宣武帝　外村　中
四月二六日　江戸の大名庭園　白幡洋三郎
五月一〇日　Chu Shi on Matter Motion, etc.　金　永植
五月三一日　粉食・粒食と臼　堀尾　尙志
　食品工業からみた粉食と粒食　松村　康生
六月　七日　江戸時代の作庭書の特徵　飛田　範夫
六月一四日　『救荒本草』の性格およびその日本救荒書への影響　白杉　悅雄
七月　五日　中國盆景　李　樹華
九月二七日　王禎の技術思想　村上　嘉實
一〇月　四日　日本の禪院における中國的要素の攝取—十境を中心として　蔡　敦達
一一月　一日　星圖にみる東西交流—アダム＝シャール、フェルビースト、ケーグラーの星圖を讀む　橋本　敬造
一一月　八日　江戸時代の和製天球儀と中國の天文學　宮島　一彥
一一月一五日　宋時代における文人達の愛石について　李　樹華
一一月二二日　六朝建康《作庭記》與中國園林　郭　湖生　張　十慶

中國古代禮制研究　班長　小南　一郎

五年計畫で開催された本研究班は、一九九四年三月をもって終了した。主要な作業であった「周禮」春官篇を賈公彥の疏で讀み、その經文および鄭玄注に訳注を施す仕事は、大卜職まで進み、春官篇の半分强を讀了したことになる。こうしたテキストの輪讀と並行して、班員による次のような研究發表が行われた。

一月二五日　深衣の復元について　相川佳代子
二月二二日　齋と醮　麥谷　邦夫

なお、本研究班の成果は、各班員の研究報告論文を纏め、『中國古代禮制研究』の題で、一九九五年春に出版される豫定である。

中國の禮制と禮學　班長　小南　一郎

本研究班は、昨年度まで開催されてきた「中國古代禮制研究班」の成果を引き繼ぎつつ、新しく班員の編成換えを行ない、本年度より五年計畫で發足したものである。方法論としては、中國の禮に關する古典的なテキストを綿密に讀みつつ、それに注釋を施こし、實際の場における儀禮のありかた、およびそれについての經學的な議論の意味を、時代的、社會的な環境の中で考えようとするものである。テキストとしては、前回の研究班を引き繼いで、「周禮」春官篇を、賈公彥の疏によりつつ讀み、その經文および鄭注に訳注を施こした。本年度に讀んだのは、雲氣や夢による占いなど卜占に關わる部分と、神祇官である大祝の職務についてである。

六朝道教の研究Ⅱ　班長　吉川　忠夫

『眞誥』七篇全二十卷の會讀をひき續いて行い、第十五卷・第十六卷闡幽微篇一・二、第十七卷握眞輔篇一の訳注を完成した。殘すところは、一卷だけとなった。

秦漢隋唐の文物資料　班長　淺原　達郎

本研究班では昨年に引き續き、隔週水曜日の研究會で出土文物に關する班員の研究發表が行なわれた。九四年の發表題目は以下の通り。

一月二六日　唐代における官人處罰について　松浦　典弘
二月　九日　漢代元氏縣の山岳祭祀　藤田　高夫
二月二三日　西晉劉弘墓をめぐる諸問題　葭森　健介
四月二〇日　秦・漢初の曆法—竹のクロニクル—　淺原　達郎
五月一八日　山東省諸城・博興出土の佛教彫刻とその周邊　稻本　泰生
六月　一日　唐代藩鎭の州縣官任用について　鄭　炳俊
六月一五日　肥致碑出現の意義　福原　啓郎
六月二九日　中國古代少數民族支配の系譜—「蠻夷」に對する稅役をめぐって—　伊藤　敏雄
九月二一日　漢代官吏の功次による昇進に

際する手續きについての若干の考察—官簿と牒を中心に—　佐藤　達郎
一〇月　五日　後漢墓の墓室規格　岡村　秀典
一〇月一九日　唐代の祈雨をめぐって　淺見直一郎
一一月一六日　イギリス・スウェーデン所藏の木簡—一九九四年度海外調査報告（一）—　冨谷　至
一一月三〇日　唐代銀價管見　井上　泰也

文獻と情報　班長　勝村　哲也

一九九四年四月から五ヵ年計畫で本研究班は始まった。文獻班と情報班に分かれる。文獻班では、中國文獻學・目錄學の流れを跡づけ、その提要の編纂を目的の一とするが、當面は各自の關心に從った研究報告に重點を置いているのであって、本年度は特に班員以外から報告を願って、文獻研究の現狀が那邊にあるかを探ろうとした。情報班では、內外の漢籍データベースの集積と漢籍電算化のための基本的な周邊・應用ソフトウェアの開發に眼目を置くが、本年度は特に京都大學大型計算機センター研究開發部の業績の繼承と岩崎宏之氏を領域代表者とする重點領域研究「沖繩の歷史情報研究」との有機的な對應とを追求した。

四月二二日　漢字典電算化の諸問題（一）　丹羽　正之
五月二〇日　漢字典電算化の諸問題（二）　丹羽　正之
五月二〇日　文獻班打合せ
六月　三日　漢字典電算化の諸問題（三）　丹羽　正之
六月一七日　百万塔陀羅尼と京大附屬圖書館本　勝村　哲也
七月一五日　『漢字典』合評會
九月一六日　わが國における古寫經の流れ—書誌學的檢討　赤尾　榮慶
一〇月一四日　情報班打合せ
一〇月二一日　版本上の幾つかの問題—陶淵明集に關する北京・臺北等の調査を中心に　松岡　榮志
一一月一一日　漢字データベースとそのネットワーク化　岩崎　宏之
一一月一八日　七ツ寺の古逸經典　落合　俊典
一二月　二日　內部コードと外部コード　星野　聰・桶谷猪久夫・柴山　守
一二月一六日　東京大學附屬圖書館藏漢籍目錄について—史記評林を中心に　戶川　芳郎

梁啓超の研究—その日本を媒介とした西洋近代認識について—　班長　狹間　直樹

本年度より二年目にはいった「梁啓超の研究」は、中國の近代世界認識形成、および近代西洋學術文化の攝取に多大な貢獻をした梁啓超の役割に主眼をおいて研究しようとするものである。本年と前年と同樣に、かれが近代西洋認識の過程で主たる媒介として依據した同時代の日本からうけた影響に意をはらった研究報告がなされた。たとえば、かれとそのマスコミ論、史論、經濟論、佛教論、文學論、學術論等の變遷にかんして、各班員による新知見が披露されている。なお、一月二一日桑兵氏（中山大學歷史系副教授）の報告は、本研究所來訪のおりにお願いしたものである。本年の報告者、およびその題目は以下のとおりである。

一月二一日　民國における戴震像—梁啓超の場合—　河田　悌一
二月　四日　梁啓超與近代學術　桑　兵
概觀・梁啓超とマスメディア　小野　信爾
二月二五日　梁啓超の人生觀における佛學の位置　森　紀子
三月一一日　梁啓超の史傳　松尾　洋二
四月一五日　梁啓超の〝在日一年、思想一變〟について　狹間　直樹
五月　六日　梁啓超と文學—メディアとしての小說—　齋藤　希史
五月二〇日　出洋五大臣と梁啓超　淺原　達郎
六月　三日　梁啓超と文明のパラダイム　石川　禎浩
六月一七日　梁啓超と王國維・魯迅を隔てるもの—蘇峰と透谷の關係を手がかりに—　井波　陵一
七月　一日　梁啓超と國民經濟　森　時彥
九月三〇日　梁啓超と社會主義　江田　憲治

一〇月一四日　梁啓超と日本の中國哲學研究　末岡　宏
一〇月二八日　「新學家」梁啓超—その學の構成—　山室　信一
一一月一一日　梁啓超の史傳　その二　松尾　洋二
一一月一八日　梁啓超と知新報　村尾　進
一二月一六日　「詩界革命」をめぐって　山田　敬三

中國近代の都市と農村　班長　森　時彦

昨年度から五年計畫でスタートした本研究班は、都市と農村の關係を主軸にすえて、中國近代史を長いタイムスパンで縱斷的にとらえなおし、前近代から現代にいたる中國社會の變動を巨視的に分析する視座の獲得をめざしている。本年度は、行政、稅制などの側面から都市と農村の問題にアプローチする報告が多くを占めた。とくに廣州と奉天、南北兩端の都市を警察行政という同じ觀點からとりあげた二つの報告、傳染病流行の動向から抗日戰爭期の中國社會を分析した報告、四川省郫縣、達縣農村の實地調査にもとづく報告など、從來にない新しい視角からの研究の萠芽は特筆に値する。

一月一四日　民初、津浦鐵道釐金の廢止と再開—都市間流通稅政策から見た袁世凱政權の性格—　林原　文子
一月二八日　珠江デルタの「坊」と「村」について　片山　剛
二月一八日　太平天國と開國前夜の朝鮮王朝　河　政植
三月　四日　國民革命期廣州の治安維持問題—警察機構を中心として—　蒲　豐彦
四月二二日　舊中國における農村の社會經濟構造　賴　涪林
五月一三日　李鴻章の天津海防充實策の實施過程—都市と農村への稅收奪の强化との關連—　細見　和弘
五月二七日　五四時期の人權思想について—一九一五～一九一九年　馬　燕
六月一〇日　中國朝鮮族自治區の歷史的起源—東北抗日戰爭と朝鮮人—　水野　直樹
六月二四日　學校教育に見る都市と農村　中島　勝佳
一〇月　七日　一九七〇年代の中國の中央地方關係　三宅　康之
一〇月二一日　一九二〇年代モンゴルの都市と農村—いわゆる「草原野黨」問題の解明に向けて—　生駒　雅則
一一月　四日　中國人口論と都鄙問題　森　時彦
一一月二五日　中國農村部におけるペスト流行—抗日戰爭期を中心に—　江田　憲治
一二月　二日　清末の奉天省城における外患と內憂—日露戰爭から辛亥革命まで—　澁谷　由里
一二月　九日　梁漱溟の鄉村建設運動—その思想形成—　森　紀子

北朝後半期佛教思想史研究　班長　荒牧　典俊

北朝後半期から隋唐期にかけての激しい歷史的變動の中において、佛教思想とは、何であって、どのような歷史的役割を演じたか、そこから、どのようにして隋唐の淨土・禪思想運動は成立していくか、といった根本問題が、いまだ、ほとんど解明されていない。本研究班は、敦煌石室に殘された寫本の中から、その時期のなまの史料ともいうべき諸寫本を撰び出し、校定・訓讀・注解して學界に提供することを、第一の目的とする。それらの、いわば眠っていた史料を活用して北朝後半期佛教思想史の具體的な過程を解明することを第二の目的とする。本年度より、五ヶ年間を豫定している。本年度は、北魏後半期の寫本と考えられる假題『成實論大義章』(S. 2463)をとり上げ、校定・訓讀・注解することを試みている。あわせて、つぎの研究發表を行った。

五月二〇日　「章」形式の論書について　荒牧　典俊
七月二二日　『成實論』の構成と內容　桂　紹隆
『成實論』と經量部　本庄　良文

近代東アジア世界の構造連關　班長　山室　信一

東アジア地域に展開してきた諸民族の相互交渉とそれによる相互規定の諸側面を總體としてとらえる研究報告を重ねることによって、次第にこれまでの一國史的視野からは捉えきれなかった歴史的特徴が見えてきた。また、今年度は東方部からの參加者を得て日中朝のトライアングルについて議論を進めたほか、たとえば上海などの據點都市において東アジア世界がいかに構造的につながっていたかなどについても檢討を重ねた。

「大東亞共榮圏」の經濟構造　班長　山本　有造

先の山本班『「滿洲國の研究』の終了をうけ、對象を「大東亞共榮圏」に廣げようとしたものであるが、當面は經濟史に分析對象をしぼり、intensive な共同研究を行いたい。できれば、いずれ豫定する『「大東亞共榮圏」の研究』のための準備會的性格をも持たせたいと考えている。現在、水曜日隔週に研究會を開いている。

異言語接觸の場としての十九世紀日本　班長　齋藤　希史

本研究班は一九九四年四月に發足したが、その母體となったのは、前年度に終了した共同研究「文學から何が見えてくるか」（班長　飛鳥井雅道）内に設けられた『漂荒紀事』會讀部會である。ヨーロッパ文學の初めての翻訳であるこの書物の會讀を通じて、『漂荒紀事』のみならず、幕末から明治期にかけて大量に出現した翻訳、外國語學習書、海外情報書などが、それまで獨自の發展を遂げてきた日本の言語文化に對してどのような意味をもったのか、そして江戸から明治へかけての言語文化のドラスティックな變容にそれがいかなる役割を果たしたのかへの關心が醸成され、本研究班の發足となった。

一九九四年度の例會は、會讀部會の成果である『漂荒紀事注釋』出版のための、原稿檢討にあてられたが、次年度より、上記テーマに沿った形で、さまざまな視點から十九世紀日本における異言語接觸の諸相を論じてゆく豫定であり、それにともなって班員の擴充もはかることとなろう。

東アジアの日常における兩界媒介事象の研究　班長　三浦　國雄

本研究班では、存在（ヒト・モノ・コト）をそれ自體として孤立的に捉える見方を排し、實としての存在を成り立たせる虚としての〈媒介者〉に注目し、その視點から東アジアの社會と日常を見直したいと考えている。このような視點の設定によって、存在が媒介者となり、媒介者が存在に轉じるという、虚實の定まらないアジア的なマンダラの世界をよりダイナミックに捉えうるのではあるまいか。

本年度（初年度）は、研究分野も方法も異なる班員が、それぞれの立脚點から手さぐりで〈媒介〉を語ったが、次年度からは、さらに大膽に〈媒介〉に踏み込む豫定である。研究會の進め方としては、資料輪讀と研究發表形式とを併用している。資料として、本年度前半は貝原益軒の『日記』元禄元年分を讀んだ。目下、『簠簋内傳』と格闘中である。

轉換期における個人と組織　班長　佐々木　克

歴史の轉換期において、個人がどのように生活し、いかに生き、あるいは生きざるをえなかったのか、有名、無名の群像の、ライフスタイルを明らかにすることを、この研究は第一の課題としている。班員各自が、一人あるいは複數の人物を擔當することにしたが、當面對象とする人物は、政治家、志士、公家、大名、幕臣、學者、豪農、老農、村役人、そして俠客、女性等々、多様・多彩な群像が選ばれた。この研究は、限られた史料と時間的制約があるため、かならずしも對象とする個人の傳記的研究をめざすものではない。むしろ轉換期における社會ならびに組織と個人との關わり、という問題に比重を置いている。さらにもう一つの問題は、まとめの段階での課題でもあるが、個々人の生活史を集合し、檢討を加えることによって、その時代の社會のイメージと斷面を、浮かび上がらせる事ができると考えており、この課題をも、常に心に留めて、研究を進めて行くことにしたい。なお轉換期をある時期と特定していないが、班員の研究領域と問題關心の關係から、主に明治維新期が中心となる。

近世前期における政治的主要人物の居所と行動　班長　藤井　讓治

一九九〇年四月から三か年の豫定で始まった本研究班は、期間を一年延長し、一九九四年三月を以て終了した。研究テーマに即して報告・討議された四年間の共同研究の成果は、一九九四年三

月に『近世前期政治的主要人物の居所と行動』（京都大學人文科學研究所調査報告第37號）として刊行した。

文學からなにが見えてくるか　班長　飛鳥井雅道

研究班は一九九四年三月に終了したが、本研究班では、班員の研究報告を行う本報告部會と並行して、日本最初の「翻訳小說」である『漂荒紀事』の會讀部會が行なわれた。

研究班終了にあたって、本報告と會讀でのそれぞれの報告書を作成することとなり、ひとまず本報告の成果が『人文學報』特集號として先に刊行されたが、會讀部會はさらに集約的な檢討が必要であり、若干の日時を要することとなろう。

象徵主義の研究　班長　宇佐美　齊

四年間の豫定で一九九三年四月より發足したこの研究班の目標と活動內容の概畧は、以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文學テクストを主な對象として、象徵主義が提起した問題とは何かを問うことから始める。その際、音樂・美術・演劇などの諸藝術との關わり、政治や社會の變動が及ぼした影響、思想史的なコンテクスト、および中國・日本など非ヨーロッパ諸國との比較對照の視點をも重視する。ついでそれらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを問う。特に二十世紀初頭のアヴァン・ギャルド藝術を、象徵主義のひとつの展開、結實あるいは變貌として見とどけたい。したがって時代區分としては、十九世紀中葉から一九二〇年代までを視野に收める。

この一年間は、なによりも共同研究の磁場を形成することをめざして、各班員の個人研究と象徵主義との接點を模索することに重點を置いた口頭發表がなされた。

コミュニケーションの自然誌　班長　谷　泰

この研究班は、おもに社會的コミュニケーションの現場資料のミクロな分析をつうじて、言語だけでなく、身振り、表情など言語外的行爲表象によってなされる行爲表象のレフェラントの階層性、自己言及を含めた指示作用、意味連關性推論、そして社會的行爲としてもつ力などを記述する、より一般的な概念枠組みを提出し、われわれの社會的コミュニケーションの基本的理解を深めることを目的として、組織された。まず手はじめに、ベートソン、ゴフマン、そしてザックスなどに代表される、それぞれにことなる先行のアプローチの位置づけがなされた。ついで、具體的な作業に移り、會話場面をＶＴＲによって記錄し、分析資料を蓄積する作業がなされるとともに、それぞれ、靈長類學、社會人類學、社會學、民族音樂學などの專門分野から、これら收集された資料の具體的分析にもとづく報告がなされた。そこでおもに取り上げられた問題は、チンプと人とのコミュニケーション裝置系の差異、自己言及性と論理階型、協調性と共有知識の可能性、含意を方向付ける裝置としての技法といった問題が議論の對象となった。ところで、後に記す一九九四年度以降の共同研究「コミュニケーションの自然誌（二）」の項にのべているような理由によって、この研究會は、さらにもう一ターム延長することで、より完全な成果とすることになった。ただこれまでの成果として、この期間に收集した會話場面を中心としたＶＴＲ資料等で、當該研究に重要と考えられるデータに、分析したコメントを付して收錄した資料集を、人文科學研究所調査資料集の一冊として發刊することにして、現在その編集にあたっている。

コミュニケーションの自然誌（二）　班長　谷　泰

本研究班は、先行する研究班「コミュニケーションの自然誌」の延長である。班長が三年後に定年になり、新たな研究會を發足するのも可能ではあるが、最後の年度は報告書のまとめに時間を費やすために、實質的には二年しかない。しかも、身振り、表情、言語などを通じた社會的なコミュニケーションの運用の諸相を、具體的なデータのミクロな分析を通じてあきらかにし、それらの適切な記述のための一般性をもった概念枠組みを析出しようという、この種の研究は、なお新しい研究領域であるために、いまだ道半ばと言った狀態である。そのようなこともあって、先回の研究テーマの延長という意味を含めて、同じテーマに（二）を付し、より一層の完成を期すことにしたわけである。そしてこの機會に、あらたに班員として、理論言語學の專門家をふくめた。

ところで、今期は、ひとつには靈長類學の方面から、言語との係わりで、靈長類の音聲コミュニ

ケーションについての詳細な報告がなされて、ヒトとの連續性と非連續性とが、新たな視點から議論された。また言語運用にかかわる問題として、命題態度表現、事態認知スキーマ、また會話分析の面からトピックス形成、含意推論、また電子ネットワークにおいて顯著にあらわれるオーサー問題等が提起された。來年度からは他の問題をふくめて、記述概念のつめに移る豫定である。

儀禮的暴力の研究　　班長　田中　雅一

一九九〇年度より四年間續いた當共同研究班は、個々人の報告を終え、一九九五年度に、『暴力の人類學』と題し刊行豫定の論文集のため執筆中である。本書の構成は、そのまま當共同研究班の暴力に對するアプローチを示しているので以下に紹介する。第一部は、より理論的、學際的な視點からの暴力についての論文から成り、本書の序論を構成する。第二部はフィールドにて直接調査、體驗した暴力現象を取り扱う。第三部は宗教儀禮に現れる暴力で、來世または現世での再生手段として位置づけられる暴力を考察の對象とする。第四部では歴史的な文脈の中で暴力の性格の變容を主として考察する。以上が研究會で到達した暴力への視點であり、今後さらなる深化を豫定している。

主體構築の文化的特質　　班長　田中　雅一

本研究班では、(1)近年注目されつつある主體(subject)や自己(self)、行爲者(actor)、パーソン、エージェント、個人(individual)、アイデンティティ、情動などの概念に着目し、そうした概念の學説史上の背景と意味を探り、(2)こうした諸概念の民族誌記述(とくに自省的・實驗的民族誌と呼ばれるもの)における有效性などを批判的に檢討するとともに、(3)通文化的觀點から參加者の專門とする地域の主體や自己、情動概念の特徴を考察することを目指す。初年度ということもあり、班長の問題提起を受けて、さまざまな報告がなされた。またシンガポールから二人のゲストを招いて公開講演を開いた。

班員　田中雅一　谷　泰　藤田隆則　根布厚子(以上所内)　松田素二(文學部)　菅原和孝(總合人閒學部)　栗本英世　田邊繁治　林勲男(以上民博)　小田亮(桃山學院大)　春日直樹(奈良大)　川村邦光(天理大)　窪田幸子(大手前女子大)　棚瀬慈朗(龍谷大)　冨山一郎(神戸市外大)　西井涼子(東京外大)　渡邊公三(立命館大)

ステイタスと職業　　班長　前川　和也

共同研究の最終年度にあたる。工業化以前の社會で、それぞれの職業が社會的にどのように評價されていたかにかんして、古典的な身分論をこえる枠組みを構築することをめざした。また同時に、さまざまな分野での「專門」職の成立について討論された。

古典インドの法と社會　　班長　井狩　彌介

「法(ダルマ)」の觀念は、古典インドはもとより現代に至るまで、インド文明の社會秩序と文化規範の思考の枠組みの基調低音をなすものとして機能し續けてきた。このような「ダルマ」を中心主題として編纂された文獻群が「法典」である。本研究班は、ヒンドゥー社會の行爲準則集として成立した古典インド法典の形成期に焦點をあて、重要法典の一つ「ヤージュニャヴァルキア法典」を取り上げ、インド學各分野の專門家の協力のもとに、その文體と内容の分析を行ないつつ、本法典の成立過程と内容の歴史的位置づけの檢討を進めてきた。現時點では、本法典の解讀作業を終了し、報告論文集の作成に向けて、様々なテーマに關しての各班員の研究報告にもとづいて議論を進めている。

班員　荒牧典俊　井狩彌介　藤井正人　般山徹(以上所内)　德永宗雄　御牧克巳(以上文學部)　赤松明彦(九州大)　永ノ尾信悟　土田龍太郎　横地優子(以上東京大)　榎本文雄(華頂短大)　狩野恭　黒田泰司　八木徹(以上大阪學院短大)　後藤敏文　後藤純子　伏見誠(以上大阪大)　島岩(金澤大)　正信公章(追手門學院大)　高島淳(東外大AA研)　竹中智泰(常葉學園大)　中谷英明(神戸學院大)　林隆夫(同志社大)　引田弘道(愛知學院大)　矢野道雄(京都産大)　松田祐子(國際佛教大)　渡瀬信之(東海大)　乙川文英　杉田瑞枝　山下勤(以上京都大DC)　梶原三惠子(大阪大DC)

知識と秩序Ⅱ　　班長　阪上　孝

一九九〇年から始まった本研究班も最終年度を迎え、これまでの議論の總括、さらに原稿檢討會の開催など、研究報告書(近刊豫定)の作成作業を進めた。

近代社會における研究者の組織化—研究所・學會・學派　班長　阪上　孝

十九世紀も後半に入ると、今日われわれが「研究者」と呼びならわしている人々が大量に出現し、さまざまな「研究所」や、専門的な「學會」「學派」へと「組織化」されてゆく。この現象を個々の研究所・學會等の検討をつうじて解讀してゆく、というのが本研究班の基本的な狙いである。初年度の本年は、班員個々の關心にしたがい、ヨーロッパ・南北アメリカ・日本におけるさまざまな研究所・學會等の具體的な事例が報告された。次年度以降は、テクスト・リーディングを部分的に交えるなどして、「組織化」にまつわる共通した論點、問題點をさらに明確にしたいと考えている。

記號・意味・文學　班長　大浦　康介

文學理論の研究を主目的とするこの研究班は、九三年四月より三年目に入り、六月以降報告書作成のための原稿検討會を行ってきた。九四年度も一月から三月までひき續き原稿検討會を行い、三月末日をもって全日程を終了した。なお報告書は『文學研究とは何か』(假題)として近く上梓される豫定である。

人文學のアナトミー　班長　山田　慶兒

グランド・セオリーの有效性が疑わしくなり、人文科學の專門化と細分化が進んだ現在、人文學は一つの轉機に立っている。この研究會は、この知的な好機をふまえつつ、人文學の方法論を中心とする新しいパラダイムの構築をめざすものである。最終年度をむかえた一九九三年後半以降は、研究報告書の作成にむけて各自論文の執筆作業にかかり、逐次相互検討を重ねてきた。目下成果報告書を編集中であり、近々出版の豫定である。

正義システムの諸相　班長　山下　正男

本共同研究班は義務論理學を强力な武器として援用しながら次の三つの順序で正義論の諸體系を研究するものである。(1)正義の觀念論的諸體系、(2)正義の法的諸體系、(3)正義の法的諸體系のサバイバル・テスト。

本研究班は以上三項目のうち、(2)を中心テーマとするものである。すなわち各種實定法がいかなる正義をどの程度表現しているのか、また現行の實定法からこぼれ落ちている正義があるとすれば、どのような實定法を新たに追加すべきかが、(2)のテーマである。しかしそうした實定法の背後には、宗教的、哲學的、ユートピア的といったさまざまの觀念的正義體系が潜んでいるはずであり、(1)では思いきり擴大された視野によって正義の問題を考察したい。最後に(3)においては、過去の、あるいは現存のいろいろな法體系が、その法體系を受け入れた集團あるいは集團のメンバーを無事に存續させえたかさせえなかったか、またさせうるのか、させえないのかに關するテストの可能性を論ずるものである。

個人研究

東方部

宋代の官僚制度　梅原　郁
六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
隋唐政治社會史研究　礪波　護
五四時期中國社會主義の研究　狹間　直樹
インド亞大陸北西地方の歴史考古學研究　桑山　正進
古代中國における説話傳承の研究　小南　一郎
東林黨の研究　小野　和子
原始佛教起源論　荒牧　典俊
中國美術の樣式と意味　曾布川　寛
中國建築の樣式・技法・空間　田中　淡
中國中世土地所有制の研究　勝村　哲也
六朝道教思想研究　麥谷　邦夫
近代中國の綿紡織業　森　時彦
敦煌寫本の言語史的研究　高田　時雄
中國古代中世の法制　冨谷　至
先秦時代の金文　淺原　達郎
中國の小説、演劇及び講唱文學の演變　金　文京
清代文化史研究　井波　陵一
中國古代文明の形成と發展　岡村　秀典
漢唐間における天文學と文化　新井　晉司
イスラーム勢力進出期とアフガニスタン・北インド　稲葉　穣
唯識思想研究　船山　徹

中國共產主義運動の歷史と思想　石川　禎浩
唐宋時代の士人　中砂　明德
宋元道教研究　横手　裕
明清時代の官僚制度　谷井　陽子
六朝時代學術史の研究　木島　史雄
中國の傳統的品詞觀　森賀　一惠
中國佛教美術の研究　稲本　泰生
高麗及び朝鮮官僚制の研究　矢木　毅

日本部

日本ファシズムの研究　古屋　哲夫
日本近代文化史の研究　飛鳥井雅道
廢藩置縣の研究　佐々木　克
植民地經濟の研究　山本　有造
文化史および文明史としての國民國家の形成　横山　俊夫
日本近世社會における政治權力　藤井　讓治
政治文化の中の社會理論　山室　信一
近代朝鮮の政治と社會　水野　直樹
日本近世の地域社會の研究　塚本　明
士族の研究　落合　弘樹
文學と近代　齋藤　希史
貨幣の研究　安冨　歩

西洋部

西洋論理思想史　山下　正男
社會的相互行爲の解讀　谷　泰
思想と制度　阪上　孝
シュメール行政・經濟文書の研究　前川　和也
インド世界の儀禮の研究　井狩　彌介
フランス散文詩の研究　宇佐美　齊
群衆現象の社會學　富永　茂樹
南アジアにおける宗教と社會　田中　雅一
文學理論の研究　大浦　康介
後期ヴェーダ文獻の成立史研究—ブラーフマナからウパニシャッドへ—　藤井　正人
デカダンス文學における自己矛盾の研究　鈴木　啓司
音聲形式の記述と分析　藤田　隆則
フレデリック・ハリソンとイギリス實證主義　光永　雅明
ドイツ中世のエトノス　佐々木博光
フランクフルト學派の政治思想　上野　成利

東方部研究會

東方學報執筆者豫備發表

二月一六日　船山　徹　劉宋時代における菩薩戒の受容とその周邊
谷井陽子　清代の地方衙門と行政資料集
三月　九日　梅原　郁　宋代官員の處罰

東方學報第六十六册合評會

一〇月一二日　小南論文　岡村秀典
稲葉論文　井波陵一
一〇月二六日　中砂論文　金　文京

事業概要

夏期公開講座—コミュニケーションにドラマをみる—

七月八日
會話のトピックはいかにつくられていくか　串田　秀也
禪問答　吉川　忠夫
七月九日
笑いの本地・笑いの本願　谷　泰
フィクションとは何か　大浦　康介

開所記念公開講演會

一一月一七日
ミメーシスの政治學—『啓蒙の辨證法』の思想圈　上野　成利
貝原益軒—内向きの宇宙　横山　俊夫
『世說新語』の美學—才から情へ　小南　一郎

一九九四年度漢籍擔當職員講習會（漢籍電算處理）

第一日（一〇月三日）
人文科學とデータベース（講演）　大型計算機センター教授　星野　聰
東洋學文獻類目の編纂とフォーマット（講義）　村田　康彦
東洋學文獻類目册子體作成について（講義）　大型計算機センター技官　河野　典

AIと情報検索（講義）
大阪國際女子大學教授　桶谷猪久夫
第二日（一〇月四日）
漢字典と漢字合成法（講義）
同志社女子大學講師　丹羽　正之
漢字コードの問題點とISO10646UCS（講義）
學術情報センター教授　宮澤　彰
計算機處理入門（講義）
大型計算機センター技官　隅本　榮子
データベースの概觀（講義）
大型計算機センター助手　川原　稔
データベース検索（一）（實習）
第三日（一〇月五日）
知識情報處理（講義）
大型計算機センター助手　石橋　勇人
漢字コードの話—漢字と外字の處理—
大型計算機センター助手　小澤　義明
データベース検索（二）（實習）
第四日（一〇月六日）
情報ネットワーク（講義）
大型計算機センター助手　金澤　正憲
UNIXと情報検索（講義）
大型計算機センター助教授　安岡　孝一
データベース検索（三）（實習）
第五日（一〇月七日）
マルチメディアと言語處理（講義）
國立民族學博物館助教授　久保　正敏
大學間ネットワークの狀況について（講義）
大型計算機センター技官　櫻井　恒正

一九九四年度漢籍擔當職員講習會（中級）

第一日（一一月七日）
漢籍一般（講演）
東京大學教授　松丸　道雄
和漢籍（講義・實習）
勝村　哲也
第二日（一一月八日）
經部書（講義・實習）
大阪大學教授　加地　伸行
聰論　集部書（講義・實習）
井波　陵一
第三日（一一月九日）
近人書（講義・實習）
狹間　直樹
史部書（講義・實習）
高田　時雄
第四日（一一月一〇日）
子部書（講義・實習）
金　文京
朝鮮本（講義・實習）
富山大學教授　藤本　幸夫
第五日（一一月一一日）
佛書（講義・實習）
華頂短期大學教授　落合　俊典
質疑應答
梅原　郁

所員動靜

。古屋哲夫（日本部）教授は、停年退官（三月三一日付）、京都大學名譽教授の稱號を授與（四月一日付）。
。山下正男（西洋部）教授は、辭職（三月三一日付）、京都大學名譽教授の稱號を授與（四月一日付）。
。三浦國雄大阪市立大學教授は、客員教授（日本部）。（比較文化研究部門、四月一日～一九九五年三月三一日）。
。串田秀也大阪教育大學助教授は、併任助教授（西洋部）。（比較文化研究部門、四月一日～一九九五年三月三一日）。
。曾布川　寛（東方部）助教授は、教授に昇任。
。田中　淡（東方部）助教授は、教授に昇任。
。佐々木　克（附屬東洋學文獻センター）教授は、當研究所教授（日本部）に配置換。
。藤井讓治（日本部）助教授は、文學部助教授に配置換。
。金　文京慶應義塾大學助教授を、助教授（東方部）に採用。
。岡村秀典九州大學助教授は、當研究所助教授（東方部）に轉任。
。井波陵一滋賀大學助教授は、附屬東洋學文獻センター助教授に轉任（以上四月一日付）。
。田中雅一教授（西洋部）は、委任經理金により、二月二三日廣島發、アンナマライ大學、マドラス大學、シンガポール大學に於いて食文化に關する調査及び文獻資料蒐集を行い、三月一八日歸國。
。前川和也教授（西洋部）は、委任經理金により、二月二八日大阪發、大英博物館に於いてシュメール粘土板に關する研究、ワルシャワ大學に於いてポーランド楔形文字研究の現狀及び所

藏粘土板調査を行い、四月四日歸國。

。高田時雄助教授（東方部）は、三月一〇日大阪發、ペンシルヴァニア大學に於いて「中世白話に關する國際學會」出席、ローマ教皇廳圖書館に於いてキリシタン中國語學に關する文獻資料蒐集を行い、四月一二日歸國。

。梅原　郁教授（東方部）は、三月二二日成田發、大英博物館に於いて敦煌遺物に關する調査及び研究打ち合わせを行い、三月二九日歸國。

。高田時雄助教授（東方部）は、五月三〇日大阪發、國家文物局、新疆ウィグル自治區博物館、甘肅省博物館等に於いて中國語史關連文物の調査を行い、七月六日歸國。

。岡村秀典助教授（東方部）は、六月六日福岡發、社會科學院考古研究所、河南省博物館等に於いて黃河流域と長江流域の墓制の比較研究を行い、六月二一日歸國。

。梅原　郁教授（東方部）は、六月一五日大阪發、エルミタージュ美術館、ロシア科學院圖書館、フィンランド國立美術館、スウェーデン東洋美術館・國立民族學博物館に於いて中央アジア將來の文物に關する研究資料の蒐集を行い、六月二二日歸國。

。前川和也教授（西洋部）は、委任經理金により、七月七日大阪發、大英博物館に於いてシュメール楔形粘土板文書の研究を行い、八月三一日歸國。

。田中　淡教授（東方部）は、ユネスコ文化遺產保存日本信託基金により、七月一七日大阪發、國家文物局に於いて大明宮含元殿日中共同保存事業に係る調査打ち合せ、大明宮遺址に於いて同事業に係る現地調査を行い、七月二三日歸國。

。谷　泰教授（西洋部）は、七月二一日成田發、大英博物館に於いて動物學系・主任研究員クラットン・ブロック氏と家畜化の過程についての意見交換及び文獻資料の蒐集、イタリア・ベルガモ縣にて出生時の母子關係介入技法についてのデータ蒐集を行い、八月二六日歸國。

。金　文京助教授（東方部）は、七月二七日大阪發、雲南省文化廳に於いて「儺戲儺文化國際學術研討會」出席、貴陽市評劇團、復旦大學古籍研究所に於いて中國演劇に關する資料を收集し、八月一五日歸國。

。金　文京助教授（東方部）は、八月二五日大阪發、ソウル大學に於いて「第一四次中國學國際學術會議」出席、慶州博物館に於いて古代日韓關係についての資料收集、海印寺に於いて高麗大藏經についての資料收集を行い、八月三一日歸國。

。梅原　郁教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月二九日大阪發、大英博物館及びスウェーデン民族學博物館に於いて中央アジア出現簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、九月二二日歸國。

。冨谷　至助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月二九日大阪發、大英博物館及びスウェーデン民族學博物館に於いて中央アジア出現簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、九月二二日歸國。

。狹間直樹教授（東方部）は、九月四日大阪發、近代史研究所、第一歷史檔案館、北京圖書館、北京大學、中國人民大學に於いて國民革命に關する研究資料蒐集及び學術交流を行い、九月一六日歸國。

。井狩彌介教授（西洋部）は、委任經理金により、九月八日大阪發、タミル・ナードゥ州政府東洋寫本圖書館、アドヤール圖書館、ケーララ大學東洋學・寫本圖書館、ケーララ州イリンジャラクダ在住のヴェーダ・ヴァードゥーラ學派傳承の繼承者パラメーシュヴァラム・ナンブーディリ氏宅に於いてヴェーダ文獻寫本の調査と資料を收集し、九月二七日歸國。

。高田時雄助教授（東方部）は、委任經理金により、九月二八日大阪發、バチカン圖書館に於いてキリシタン中國語學に關わる資料蒐集を行い、一〇月一二日歸國。

。麥谷邦夫助教授（東方部）は、委任經理金により、一〇月三〇日大阪發、北京社會科學院、八仙呂、上海社會科學院、福建社會科學院、香港大學、故宮博物館に於いて道教文化と食物禁忌に關する資料蒐集及び現地調査を行い、一一月二〇日歸國。

。桑山正進教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一〇月三〇日大阪發、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に關する調査を行い、一一月二七

日歸國。

◦岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一〇月三〇日大阪發、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に關する調査を行い、一一月二七日歸國。

◦稻葉　穰助手（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一〇月三〇日大阪發、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に關する調査を行い、一一月二七日歸國。

◦船山　徹助手（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一〇月三〇日大阪發、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に關する調査を行い、一一月二七日歸國。

◦曾布川　寛教授（東方部）は、委任經理金により、一一月六日大阪發、北京大學、故宮博物院、山東省博物館等に於いて中國美術に關する研究資料調査及び資料蒐集を行い、一一月二〇日歸國。

◦狹間直樹教授（東方部）は、一一月一九日大阪發、國立中央圖書館に於いて「孫文創立國民黨一〇〇周年學術討論會」に出席、近代史研究所に於いて國民革命及び梁啓超に關する研究資料蒐集を行い、一一月二七日歸國。

◦岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、一二月七日大阪發、蘇州市草鞋山遺跡に於いて先史時代水田の發掘調査を行い、一二月一三日歸國。

外國人研究員

◦周　紹泉
中國社會科學院歷史研究所副研究員
徽州文書の研究（比較社會客員部門）
受入教官　小野教授
期間　三月一五日～九月一四日

◦Richard Rubinger
インディアナ大學東洋言語・文化學科教授
一九世紀日本における識字の社會史的研究（日本學客員部門）
受入教官　横山助教授
期間　五月二三日～一九九五年五月二二日

◦Paul Dumouchel
ケベック大學モントリオール校教授
近代ヨーロッパにおける医學思想と医療制度（比較社會客員部門）
受入教官　富永助教授
期間　一〇月一日～一九九五年五月三一日

招聘外國人學者

◦金　正起　西原大學校教授
一八七六～一八九四年朝鮮・清朝關係史の研究
受入教官　森助教授
期間　一月二〇日～一九九五年一月一九日

◦Marguerite Wells　ウーロンゴン大學助教授
〝俄〟におけるユーモアの研究
受入教官　横山助教授
期間　三月一日～五月三一日

◦張　正明　山西省社會科學院研究員
明末清初における山西商人と國家權力の研究
受入教官　小野教授
期間　四月一日～五月三一日

◦Pierre Rasanvallon　社會科學高等研究院主任研究員
國民主權の政治社會的研究
受入教官　富永助教授
期間　一〇月一七日～一〇月三一日

◦錢　婉約　武漢大學歷史系講師
日中近代思想の比較研究
受入教官　狹間教授
期間　一〇月一八日～一九九五年九月三〇日

◦榮　新江　北京大學歷史系教授
中央アジア發現寫本による多言語社會の研究
受入教官　高田助教授
期間　一〇月二二日～一一月五日

◦劉　秉虎　延邊大學民族研究所助理研究員
日本統治期朝鮮人の海外移住に關する研究
受入教官　水野助教授
期間　一一月一四日～一九九五年一一月一三日

外國人研修員

◦Fabrizio Pregadio　イタリア中極東アジア研究所メンバー
「周易參同契」の注釋

受入教官　吉川教授

期間　七月一日～一九九五年三月三一日

◦François Daniel Voegeli　ジュネーブ大學博士課程大學院生

ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ第五卷（動物犧牲祭章）の研究

受入教官　井狩教授

期間　九月一日～一九九五年二月二八日

外國人研究生

◦James George Robson　カリフォルニア大學博士課程大學院生

中國思想史における南嶽衡山の研究

受入教官　荒牧教授

期間　四月一日～一九九五年三月三一日

◦Monika Elisabeth Kure　チュービンゲン大學博士課程大學院生

近代日本における書簡文例の研究

受入教官　横山助教授

期間　四月一日～一九九五年三月三一日

◦Abigail Schweber　ハーバード大學博士課程大學院生

政治的社會化に關する研究

受入教官　山室助教授

期間　四月一日～一九九五年一月三一日

◦Hidegard Scheid　ヴィルツブルグ大學博士課程大學院生

中國明時代の官營機織と朝貢の關係

受入教官　田中教授

期間　四月一日～一九九五年三月三一日

◦Brigitte Steger

現代日本における〝眠り〟の文化學的考察

受入教官　横山助教授

期間　九月一二日～一九九五年七月三一日

◦John Salvatore Lobreglio

十九世紀後半の日本における政治と佛教の社會史的研究

受入教官　横山助教授

期間　一〇月一日～一九九五年三月三一日

◦Andrew Meyer　ハーバード大學博士課程大學院生

「五經正義」の研究

受入教官　吉川教授

期間　一一月一日～一九九五年六月三〇日

出版物

紀要

人文學報　第七三號（紀要第一二二冊）

一九九四年一月三一日刊

人文學報　第七四號（紀要第一二四冊）

一九九四年三月三一日刊

東方學報　第六六號（紀要第一二三冊）

一九九四年三月三〇日刊

歐文紀要　第二八號

一九九四年三月三一日刊

文獻類目　一九九一年

一九九四年三月三一日刊

研究報告その他

中國語史の資料と方法　高田　時雄編

一九九四年三月三一日刊

近代日本のアジア認識　古屋　哲夫編

一九九四年三月三一日刊

近世前期政治主要人物の居所と行動　藤井　讓治編

一九九四年三月三一日刊

所報「人文」第四〇號

一九九四年三月三一日刊

A Study of the Nilamata–Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir. Edited by Yasuke Ikari.

一九九四年三月三一日